

## 「特集:情報セキュリティ大学院大学 10 周年」に寄せて

田中 英彦\*

情報セキュリティ大学院大学は、2004 年 4 月に開学した。従って、2014 年 4 月には満 10 年を迎えた。紀要は今回で第 6 号であるが、この 10 年を記念して特集を組むことにした。開学当初は、あらゆることをゼロから定め作り上げることから始めたが、この 10 年で、情報セキュリティ総合教育、実務志向、官民学連携という基本線が固まってきた。その間、文部科学省からは、二つの人材育成プログラムの支援をいただき、多くの大学や企業の方々と連携した人材育成の輪を創り上げてきた。

情報セキュリティという領域で、何を教えるべきか、それは正に、お手本の無い状態で、この 10 年の教員による試行錯誤を通して決められてきたものである。しかし、求められる内容は時代によって変わる部分もあるし、また不変の所もあろう。我々が作り上げてきた教育というものは、どういうものであるか、今一度振り返り、この時点で現状をここに記しておくのも意味のあることであろう。

一方、大学院は、研究と教育とを並立させる所である。最先端の研究を行うことで、教育に反映させる。従って、大学院の教育は、どこか他所で作られたテキストを用いる教習所ではない。自ら研究し、社会の動きを学ぶことにより、教育の中身を創り上げる所である。従って、教育の現状を述べることは、取りも直さず、今まで研究してきたことの裏返しである。

さて、そういう記録を作成するときの行き方として、各分野の現状を一様に、歴史的に記述するのではなく、各 4 分野のリーダーが、現時点で考えていることをまとめたのがこの 10 周年特集である。暗号テクノロジーの有田は、今後の暗号の展開に向けて期待される新しい考え方を解説した。システムデザインの佐藤は、過去の情報セキュリティ大学院大学の修士論文にみられる研究の動向をまとめ、法とガバナンスの湯淺は、正に今ホットトピックになっている個人情報保護法の改正に当たっての考察を示し、セキュリティリスクマネジメントの原田は、情報セキュリティマネジメント手法の来し方行く末を論じた。

この特集に含まれる 4 分野の論文は、従って、大学院が作り上げてきた 4 つのコースの教育や研究が、今どういう状況にあるのかを垣間見せてくれる。それぞれの分野が今何を問題としているのかを見せることで、歴史の中における現在を明示しているのである。

元より、情報セキュリティ大学院における情報セキュリティ教育としての内容の良し悪しは、諸賢の批判に待つことにしたいが、この教育内容は留まっているものではない。毎年毎年、タイトルは変わらないが、中味は大幅に変わっているものも多い。それは、情報セキュリティの領域という性質がそうさせる部分もあるが、大学院教育の本質としてそうなる部分も多

---

\* 情報セキュリティ研究科 教授

田中英彦：「特集:情報セキュリティ大学院大学 10 周年」に寄せて

い。

情報セキュリティ大学院大学は、新たな 10 年に入った、この時期に際し、大学院では、連携・発信・展開という基本方針を掲げ、活動を開始している。すなわち、連携とは、従来に増して外部の皆様と協力して活動を進めたいということで、この大学院が情報セキュリティに携わる志を持った人々が集う場となること。発信とは、情報セキュリティの啓発活動の他、毎年生み出されるアイデアを、今後のグローバルなイノベーションに繋げること。そして、展開とは、教育のスペクトラムを、大学院教育のみならず企業内教育にも使って頂ける形に少し広げること、また情報セキュリティ活動を、情報系から、より広く、電力・交通・医療・機械などの分野に拡大しようということである。

大学院という学問の府を背骨とし、新時代のセキュリティ対応方法論へのブラッシュアップを中心に、その周りに広い活動を組み合わせることで、実務的で、この分野をリードする大学院にしてゆければと考えている。そして、2024 年には、その時代の教育・研究内容を記す機会が訪れ、この紀要を読み返すとき、如何に時代が変わったのか、それを実感できるであろう。是非そうありたい。

私どもは歴史を記す作業をしている。これは、すなわち、情報セキュリティを教えるとはどういうことか、そのありようを創り上げているのである。